

会津の歴史シリーズ



第12回 会津の歴史と伝統産業

湯田 祥子 (ゆだ さちこ)

若松城天守閣郷土博物館
学芸員



本連載は12回にわたり会津の歴史について様々な切り口でご紹介をしてきたが、最終回である今回は、会津の伝統産業と歴史について紹介してみたい。

会津の伝統産業と聞くとまず「漆器」「会津塗」を想像される読者の方が多いのではないかと思われる。そこで、まず漆器について取り上げてみる。この漆器産業について、よく言われるのが戦国時代に会津を治めた蒲生氏郷によってその繁栄の礎が築かれたということである。言い換えれば、「産業」として安定生産そして供給・流通の仕組みを整える素地が、氏郷の時代に創られたのである。蒲生氏郷が生まれ育った近江国日野は、日野椀と呼ばれる漆器の産地で、日野商人という言葉があらわすように日野は商工業が活発な街でもあり、その流通は全国に広がりを見せるような力強いものであった。そして日野の領主だった蒲生氏郷が伊勢松坂そして奥州会津に移封されたことにつき従って移り住んできた職人たちが、会津の地に漆工芸の技術を根付かせたのである。ここか

ら、漆器作りが盛んになっていき、以後の会津の領主たちにも保護奨励されていった結果、会津藩政時代にはもっとも重要な産業の一つとなっている。例えば、漆や、後に述べる蠟（漆の実から採取する）は、貴重な資源であるため自由な売買が認められておらず、藩は専売制を取っていた。また、江戸時代後期（文化年間）には、塗りに従事する職人の家が300軒をゆうに超していたことが記録に残っている。まさに会津が一丸となり、この産業にエネルギーを注いでいた。

しかし、戊辰戦争後はこの漆器産業も大きなダメージを受け低迷期を過ごすことになった。「藩＝国」が無くなり、武士達は会津の地を離れなければならなくなったため、この地に居住する人々が激減したのだから無理もない。だが、地元に残る商人や職人達の踏ん張りや努力の甲斐あって、明治時代の後半頃にはかつての勢いを取り戻すことが叶い、現代まで受け継がれてきたのである。さらに現代では、伝統的な作にとどまらず現代アート作品まで製作され、幅広い人々に愛され



会津漆器

ている。

さて、ここまで漆器について述べてきたがこの漆と深いかわりがある「蠟燭-ろうそく」についても触れておこう。ろうそくの原料は蠟であり、これは漆の実からしぼり取ったものから出来ている（時代が下ると西国地方の櫃はぜから採取される蠟も流通していく）。会津では蒲生氏郷が領主となる以前から蠟は産出されていた。たとえば、天正年間に葦名盛隆は織田信長に1千挺ちようのろうそくを贈っている記録がある。このように、すでに権力者への進物として使用されるような希少性を持っていたろうそくだが、氏郷や子の秀行の時代頃には漆を採取する樹の植樹が積極的に勧められ保護されていったため、漆や蠟が安定して採取できる仕組みが整っていき、漆器と同様に最重要産業として発展を遂げていった。

電気がない時代、人々の生活を明るく照らす手段は限られていた。その一つであるろうそくの一大産地が会津であり、江戸時代を通じてろうそくは漆器と共に会津藩の財政をささえる重要な産業となっていたのである。幕末期、不安定な政情や

戊辰戦争を描く風刺画がたくさん制作されたが、その中では、旧幕府側の会津藩を表す際にろうそくをなんらかの形で描いているものが多い。これは、当時の人々にとって「会津といえばろうそく」という認識が出来上がっていたからであろう。人々の生活に欠かせない重要なろうそくを産出していたのが、この会津であることが広く世に知られていた証である。ちなみに、白い和ろうそくに草花の絵などが描かれた絵ろうそくも、当時から生産されていた。今では、草花の絵はもちろんのこと多種多様な絵が描かれ、お土産品としても人気を博している。

さらにもう一つ、会津を代表するやきもの「本郷焼」も、伝統産業としては欠かせない。本郷焼は、会津藩祖・保科正之が瀬戸から呼び寄せた職人が本郷の地でやきものを始めたのが本格的な起源とされている。そして鶴ヶ城の屋根に葺かれている「赤瓦」。これも本郷の地で、雪国会津の寒冷な気候に耐えられ凍み割れに強い瓦として改良されたものである。また、江戸時代の後期には職人が有田で技術を習得し、本郷での磁器制作に成



会津絵ろうそく

功する。このように本郷のやきものは人々の生活と会津のシンボルである城にも欠かせない、重要な産業であったのだが、やはり戊辰戦争で大打撃を受け、そこからは細々と続いていくことになった。再び本郷焼が活気を取り戻すのは昭和に入ってからのことである。1958年、ブリュッセルで開催された万国博覧会でにしん鉢がグランプリを受賞したのである。ここから、本郷焼は民芸調のやきものとして人気を博し、現在では新たな作風なども生み出されながら、伝統産業として続いているのである。

ここまで、人々の生活に欠かせない「モノ」の中から会津の伝統産業を紹介してきたが、締めくくりとして、人々の「心に寄り添うモノ」で欠かせない（という人もいるだろう）産業を最後に紹介したい。

全国的に見ても福島県は有数の酒どころであり、この会津でも数多くの酒蔵から美酒が世に届けられている。筆者は下戸であり、残念ながらこの会津の酒の素晴らしさというものを自身の言葉で語

ることは出来ないが、他県の友人たちから会津の酒が賞賛を受けることが実に多く、その美味しさは確かなものなのだろうと誇らしく思うところである。そしてこの会津の酒の転換期は江戸時代にあったとされている。

会津藩の5代藩主松平容頌^{かたのぶ}は、藩政改革を成功させた会津藩の中興の祖として名高いが、実は時の会津藩家老・田中玄宰^{はるなか}の功績によるところが大きい。そして、この田中玄宰と会津の酒には密接な関わりがある。玄宰は、切迫した経済状況だった当時の会津藩財政を立て直した人物として知られているのだが、彼が推進した改革案の中には酒造りも含まれていたのである。その頃の会津の酒は決して上等とはいえないものだった。しかし玄宰は酒造りの先進地から杜氏^{とうじ}や麴師^{こうじし}を招き、従前のものよりはるかに良質な清酒を作ることに成功したのである。さらには藩直営の酒蔵まで作るに至る。やがてこの酒蔵は民営化され、残念ながら当時うみ出された清酒は現在では見ることもできないが、酒造りのノウハウや伝統は現代まで受け継がれ、酒どころ・会津のプライドを守っている。

以上会津の伝統産業と歴史について述べてきたが、これらを紹介していくと、伝統産業ということがよくわかる。そもそも、産業とは「人間生活に必要な商品・サービスの生産・提供を行うためのさまざまな経済活動（以下略）－大辞林より－」という意味だが、会津の先人たちが作り出した「モノ」や「コト」は広く流通し、人々の生活に必要とされ大切にされていたのである。それらが昔も今も変わらず、人々の生活の助けとなり生活に潤いを与えていることを考えると、これも立派に会津人のお国自慢のタネになるのではなかろうか。